

アフガニスタン

もう何も

してくれなくていい。

中村 哲さん

いま、アフガニスタンの市民にとっていちばんの課題は「いかに明日、子どもたちに食べさせるか」です。そういった生活上の問題から言うと、状況は空爆前よりはるかに悪くなっています。アメリカ軍の軍事活動は継続しているし、パキスタンなどに逃れていた難民が半強制的に帰されたため、そのほとんどが路上生活者として首都のカブールに集まっています。そもそも干ばつで土地が荒れ、生活ができないから出ていったのに、またそこに帰されてはどうしようもありません。パキスタンなどにいけばまだ職もあり、なんとか飢えずにすんでいたひとたちが、ひとり10ドルというわずかなお金で戻され、故郷に帰ることもできず、カブールにとどまっています。

カブールでは、外国の援助ラッシュによる急激な物価高も深刻です。NGOや国連団体がたくさん入ってきたので、わたしたちは「一番は終わった」と判断し、カブールを撤退しましたが、カブールの物価高も撤退理由のひとつでした。また、法外な給料を出す援助組織に人材を引き抜かれてしまつ、ということもありました。



アフガニスタンについては、以前よりは実態も報道されるようになりましたが、ほとんどの場合、首都カブールの実状しか見えていないでしょう。アフガニスタンのなかで、カブールだけは西洋化が進んだ特殊地域です。いまの政権は国民から支持されておらず、多国籍軍の防衛でかろうじて守られているカブール市は、外国の軍隊が引き上げれば、数日で大混乱になるだろうと思われます。危うい人工高のような存在です。度重なる外国の介入に、アフガニスタンの市民は「またか」とあきらめています。一方で、いままでもなく反米感情が高まっています。まさに内乱前夜、という状況ですが、その危機感はおそらく報道では伝わっていないでしょうね。

いま進んでいる援助というのは、ある意味フィクションで、空爆の論理と同じなのです。「悪い政権がつぶれて自由と民主主義が回復し、いま着々と復興が進んでいる」というシナリオで、すべてが進んでいます。アメリカ側の論理でひとつの国を壊し、アメリカ側の論理で復興する、それに国際組織や日本ものつかつているという構図は、空爆の

なかむら・つとむ ●1984年に
来、アフガニスタン、パキス
タンで医療活動続ける医
師。「ベシヤール会」現地代
表。アフガン市民の立場から
講演、執筆などを行っている。

・ときからほとんど変わっていないのです。
みんながわずかな水を求めて、るばの背中に
水袋を積み、半日がかりで水を集めている
ようなところに、国際組織のスタッフ用に

プールをつくったりしている……そんなこ
とをして反感をかわないはずはありません。
イデオロギーよりも、ひとりのいのちが
大切です。アフガニスタンの市民が求めて
いるのは、わたしたちが
考えるのとそう変わらな
いこと、安全で、家族が一
緒にいられて、食べるのに
困らないということです。
まずは、みんなが平和に落
ち着いて暮らせる状態を
つくるのが先です。「も
う何もしくなくていいから、
ほうっておいてほしい」
というのが、市民の心情
ではないでしょうか。旧
ソビエトをはじめ、外国
が介入する前のアフガニ
スタンは、それなりに豊
かな国だったのでから。



ベシャワール会では、「何よりも農村の復興が先決」と、診療所のまわりに井戸を掘り、灌漑水路をつくっている。完成した水路を眺める中村さん（中央）。

立つてものを言わないアフガン人は、「外国人は信用できない」と言っています。自然と一体に生きる彼らのそのがんこさに、希望を見る気がして
います。